
lost angel

ハッシー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

l o s t a n g e l

【Nコード】

N 0 4 0 8 C

【作者名】

ハッシー

【あらすじ】

天使のソラは、ひょんなことから親友のジンと人間界に旅立つ。

第一話：旅立ち

そこは雲の上の更に上の世界、その名も『天界』

そこに住む一人の男の子。その名は『ソラ』

彼は天界に住む10才の天使である。特徴としては羽根が生えており、頭上には黄色いワツカがある。

そしてその天使は、強さの基準としてこのようなレベルがある。

- ・天神
- ・天光
- ・天双
- ・天人
- ・幼生

これは上からレベルの高い順番に並んでいる。

天神は王様のこと、幼生は10才未満の子どもを指す。

残りの天人、天双、天光が主な位であり、この3つはさらにαβγと別れ、合計9種類に分けられる。

そして今年10才のソラは天人γとなった。

ソラは友人のジンと会話をしながら自慢の羽で飛びながら散歩した。

ソラ

「やっと俺等も幼生からランクアップしたぜ。」

ジン

「そうだな、なんか大人になったかんじだな。」

ソラ

「でも早くエンジェルトライアル（ＡＴ）受けて天光とかまで昇進したいよなあ」

エンジェルトライアル、略してＡＴとは、試験を受けて、その成績に応じてレベルが変わるというものだ。

ジン

「でもそんな簡単にレベルが上がるもんじゃないよなあ、今俺等が使える技といたら、天使のワツカをブーメランのように投げる『ピッチリング』しかないんだから　レベルをあげるには新しい技を覚えなきゃ！」

ソラ

「そうだな、なんか技でも覚ええないとな！よし、今から特訓だ！」

ジン

「特訓つつつたって何すんだよ。」

ソラ

「確かに　まあ取りあえず家で考えてくるよ！ジンも考えてこいよ！」

ジン

「ラジャー」

ソラは家に着くとテレビを見ながらグータラしている父親を見つけた。

ソラ

「ただいま父さん」

父

「おう、帰ってたのか。ちょうどいい、今お前の為になるニユースがやってるんだ」

ソラ

「ん？なにに。」

ニユース

「今日、一人の天使が天界と人間界を結ぶ『ミラーホール』を通ったとして行方不明になりました。この天使は、人間界にあるなんでも願いが叶うという『神秘の雫』を求めてこのホールに入ったとされています。」

父

「お前もミラーホールには気を付けろよ。一度入ると出れなくなるみたいだからな」

ソラ

「分かってるよ！」

しかしソラはこの時思った。この神秘の雫を手に入れば天光どころか天神にもなれるんじゃないかと。

翌日、早速ソラはジンにこの事を話した。ソラ
「んでジンはどう思う?。」

ジン

「面白そうだね」

二人は不敵な笑みを浮かべた。

ソラ

「決定だな、じゃあいつ決行する?。」

ジン

「そうだなあ、早い方がいいな。じゃあ明日の夜なんてどうだ?。」

ソラ

「いいねえ、あとさっき図書館で調べただけど、ミラーホールの
場所は禁断の森の下にある雲の中にあるみたいだから、そこはピ
ツチリングで雲を切り裂いて入ろう。」

ジン

「オッケー!じゃあ明日禁断の森の前に午後七時に集合な!。」

ソラ

「ああ!じゃあ!。」

ソラは家で準備をしてワクワクしながら明日に備えた。

翌日の夜

ソラ

「おまたせ！」

先に集合場所に着いていたジンに手を振った。

ジン

「よし、来たな！早速始めよう！」

二人は禁断の森の下にある雲に近づいて

ソラ・ジン

「ピッチリング」

と唱えながらワツカを投げて雲を切り裂いた。

すると雲の切れ端から眩いほどの光がこぼれだした。

ソラ

「よし、この中に飛び込むぞ！」

ジン

「うん！」

二人はミラーホールに飛び込んだ。

ミラーホールに入ると体を取り巻く気流が起こり、始めは変な違和感が生じたがじょじょになれてきた。

やがて体を取り巻く気流が収まり、ヒンヤリとした空気が二人の肌に触れた。

目を開くとそこは高いビルが立ち並ぶ東京の中心街だった。

第二話：署（前書き）

ソラ、ジンは東京をさ迷う。あても分からずに
はたしてどうなる？

第二話：署

東京の中心街へと降り立ったソラとジン。

そこは天界とは全く違うもので、人間が多く騒がしいものだった。

ソラ

「人間界ってスゲーなあ、人間が沢山いるよ。こんなかに天使はいねえのかなあ？」

ジン

「いるわけ無いだろ！人間界なんだから」

ソラ

「だよな。んにしてもここにいるやつは羽とか生えてないんだなあ、ワツカもないし。」

ジン

「ホントだ！人間って空を飛べないんだね！」

ソラ

「よし、それじゃあここにいる人間どもに、空を飛んできるところを見せて自慢してやろうぜ！」

ジン

「ちょっと待て、昔本で読んだことがあるんだけど、天使の力は天界でしか使っちゃいけないって書いてあったよ。」

ソラ

「そんなのどうでもいいじゃん。ジンが飛ばないなら俺だけでもあの高い建物まで飛んで行っちゃうもんね。」

そついうとソラは地面を蹴り宙を飛んだ。

ジン

「ちょ、ちょっと置いてかないでよー。」

ジンもソラを追って空を飛んだ。

ジン

「そついえばソラは神秘の雫の手がかりを持ってるの?」

ソラ

「いや、全然。ジンは持ってる?」

ジン

「俺が知ってるのは神秘の雫がとても危険な場所にあるということだけかな」

ソラ

「そうなんだあ、じゃあまずこの人間界でやるべきことは情報収集だな」

ジン

「でもどうやって情報収集するんだよ?」

ソラ

「一昨日テレビで見たんだけど、一人の天使がこの人間界にやってきた、みたいなことを言ってたんだ。」

ジン

「あっ、分かった、要するにその人を見つけて」

警官

「おい、お前達、そこから降りてこい。」

突如二人の会話を警官が遮った。

ソラ

「な、なんだあいつ？」

ジン

「やっぱり人間界で空を飛ぶのはまずかったかなあ」

ソラ

「それにしてもあの人間、面白いカッコしているな。」

ジン

「たしかに。」

二人は警官の制服を指差してクスクスと笑った。

警官

「おい、早く降りてこい。」

ソラ

「ジンどうする?。」

ジン

「ここは、素直に降りた方がいいかもしれないな。」

ジンがそう言うと、ソラも納得し陸上へ舞い戻った。

その瞬間、カメラのフラッシュが二人の目を眩ませた。

記者A

「なぜあのようなところで飛んでいたのですか？」

記者B

「その頭上にあるワツカはなんなんですか？」

記者C

「一体あなた達は何者なんですか？」

記者からの質問攻めが来た。

警官

「だあゝうるさい、記者達は引っ込んでろ、この二人は本官が取り調べをする。」

そう言うと記者は次々と去って言った。

ソラとジンは暫くの間、目がショボショボしていたがやがてその症状は治まった。

ソラ

「俺等をフラッシュから守ってくれてありがとう」

警官

「は？なにを馬鹿なことを言っているんだ？とりあえずお前らには署まで来てもらう。」

二人は無理矢理署に連行された。

警察署

警官

「取りあえずこの部屋で待っている。」

そう言われて二人は小さな取り調べ室に連れていかれた。

警官が部屋から出ていったのを確認してから二人は話した。

ジン

「ここにいれば何か情報を得られそうだな。」

ソラ

「どうしてだ？」

ジン

「考えてもみろよ、俺等は空を飛んでいるだけでこの場に連れていかれた。と言うことは、この世界にいる、もう一人の天使もこの場へ連れていかれた可能性が高い。」

ソラ

「そうか！じゃあここにいれば、その天使に会えるかもってわけか！」

ジン

「そう言うことだ。」

ソラ

「っじゃあ、これでまた一步神秘の雫に近づいたぜ」

ジン

「いや、まだそれは分からない」

ジンが事を言い終わった時、警官が入ってきた。

警官

「お前らのような頭上にワッカがあり、背中に羽があるやつが、オーストラリアのメルボルンで発見されたみたいだ。」

ソラ

「ホントかよオジチャン！」

警察

「本官はオジチャンではない、これでも24歳だ。」

ジン

「ていうかオジチャン、その人に会わせてくれ！」

警官

「だからオジチャンではない。んで今そいつが、東京に向かってきている。だからしばらくお前らはここで待機している」

オーストラリア

そこにはもう一人の天使のガクがいた。

ガク

「ソラ、ジン待ってるよ。」

第三話・truth（前書き）

ソラとジンはガクと出会う。色々な事を話し、真実を知っていく。

第三話：truth

時はたち、今日はガクが東京に来る日だ。

ソラ

「ガクとかいう天使が来るのって今日だよな？」

ジン

「そうだね。その人に会ったら神秘の雫について何か知っているかも知れないしね。」

ソラ

「うおー、早くガクに会いたいなあ！」

ジン

「さっきオジサンが言ってたけど、正午になったら来るみたいだから、あと3時間の辛抱だね。」

ソラ

「じゃあ俺はそれまで寝てるとするよ。来たら起こしてね。」

そついうとソラはグーグーと寝息をたてて寝た。

ジンもソラの寝顔を見てつられて寝てしまった。

ジンが目を覚ますと時計は12時を指していた。

ジン

「ヤベ、もう時間じゃん！」

ジンは急いで横で大の字になって寝ているソラを起こした。

ソラ

「ん？もうガクは来たのか？」

ジン

「ただけど多分もう来るよ。」

するとソラとジンのいる部屋の扉が突然開いた。

警官

「お前らの同類が来たぞ。さあこの中へ入れ。」

警官はガクを二人のいる部屋へと押し入れた。

警官

「まあ仲良くやれよ。」

警官はドアをしめて鍵をかけてどこかへ行ってしまった。

しばらくこの部屋では沈黙が続いた。

ジン

「あの　初めましてガクさん」

ジンが始めに沈黙を破った。

ジン

「俺達は神秘の雫が欲しくてこの人間界に来たんだ。ガクさんは何

かしてますか？」

するとガクはゆっくりと口を開いた。

ガク

「お前達は何のために神秘の雫を」

ソラ

「それはレベルを一気に天光αまで上げるためにさ！」

ガク

「そうか　お前らはまだ何も分かっていないようだな」

ソラとジンは驚きのあまり顔を見合わせて目をパチクリさせた。

ジン

「ガクさん、どういうこと？」

ガク

「神秘の雫を使うためには、ある程度の力量が無いといけないんだ。そうだな、最低天光γは無いとダメだ。神秘の雫ってのは天使の力を使って初めて効果を発揮するものだからな」

ソラ

「そうだったのか、じゃあ俺等が人間界に来た意味無かったんだな」

ジン

「諦めて帰るしか」

ガク

「ちよつと待て。人間界つてのは良いところだ。それに人間界で修行した方が天界よりも成長スピードが早いらしい。」

ソラ

「そ そうなのか？なあジン、しばらくの間ここで一緒に修行しないか？」

ジン

「うん、悪くないな。それに成長して天界に帰った方が親も喜ぶしね。」

ガク

「決定だな。じゃあ俺が君等を指導してあげるよ。こつ見えても天光βだからね。」

ソラとジンは一瞬今の言葉に耳を疑った。

ジン

「ガクさんって天光βだったんですか？こんな人に修行を見てもらうなんて光栄だ。」

ソラ

「ほんとほんと。ラッキーだよな。」

ガク

「では明日から修行を開始する。今日は沢山寝ろよ」

ソラ・ジン

「アイアイサー」

そして夜、ソラとジンが寝静まった時にガクは呟いた。

ガク

「お前らは今ここで修行をして強くならなければならない、明日から覚悟しろよ。」

ガクも明日に備え眠りについた。

第四話：特訓開始（前書き）

ソラとジンは、ガクからの特訓を受けることになる。二人の行く末は

第四話：特訓開始

ソラとジンは、窓から漏れる光を受けて目が覚めた。

ソラ

「ふああ、なんか昨日から昼寝とかしまくってるから目が冴えてるぜ！」

すでに起きていたガクは

ガク

「おはよう、修行は9時30分から始めるからとりあえず朝飯を食べよう。」

ソラ・ジン

「はあい」

警官が持ってきた乾パンを5袋食べ終わり、やがて9時30分になった。

ガク

「よし、じゃあ特訓するか。」

ジン

「ガクさん、聞きたいことがあるんどすけど。こんな何もない部屋で何をするんですか？」

たしかにこの部屋には何もない。しかしガクはニヤリと笑った。

ガク

「まあ見てろ。」

そう言うときガクは、頭上のリングを手に取り

ガク

「ワープ！」

と唱えた。

すると、ガクのリングが大きくなり、3人の回りを囲んだ。

ソラ

「な、なんだこれは？」

ソラがそんなことを言ってる間に、目に眩い光が飛び込んできた

しばらくして目を開くと、そこは、蒼い海の近くにある砂浜だった。

ジン

「な、なんだここは？」

ガク

「ここは小笠原諸島だよ。」

ソラ

「小笠原って どこだ？」

ジン

「人間界か？」

ガク

「ああ人間界だ。」

ソラとジンは、初めて見る海に感動した。

しかしすかさずジンは

ジン

「このワープというのも天使の技の1つですか？」

ガク

「ああ、天双βレベルの技だ。まあこの技は見たことのある場所にしかワープ出来ないがな。」

ソラ

「ガクさんここ来たことあるの？」

ガク

「メルボルンから東京に来る途中で見つけて、これはと思ったんだよ。」

ソラ

「そうかあ、ねえガクさん、この技教えて！」

ガク

「駄目だ」

ソラ

「何でだよ！」

ガク

「それは お前のリングではまだレベル不足だからだ。」

ジン

「レベル？リングにレベルなんてあるんですか？」

ガク

「ああある、お前らのレベル2だな。」

ジン

「レベル2 じゃあピッチリングはレベル2なのか？」

ガク

「まあそういうことだ。」

ソラ

「 質問なんだけど 身分のレベルとリングのレベルって比例してるのか？」

ガク

「いい質問だね、その答えはNOだ、世の中には羽を武器とし、リングレベルが1なのに天光γの人がいるしな」

ソラ

「そうなんだあ。」

ガク

「でも普通はリングレベルを上げておく必要がある。その方がAT（昇段テスト）でも評価が高くなりやすい」

ソラ

「なるほど」

ガク

「ということで、今回はこういう特訓だ。」

そついうとガクはリングを手に取りこつうた。

ガク

「ラージ！」

するとリングはみるみるうちにでかくなつていった。

ガク

「まあこんなもんだな。」

ジン

「この技は家の母さんがよく使つてる技だ」

ソラ

「家の母さんもよく使つてるぞ」

ガク

「そうか、ならお前らにもできるはずだ、頭で大きくなるリングを想像しながらやってみろ。」

ソラとジンは、頭で想像してからリングを手に取り

ソラ・ジン

「ラージ！」

と唱えた。

しかし何も起こらない。

ガク

「やっぱり一度目じゃ無」

ガクがその言葉を言い終わる前に、突然ジンのリングが大きくなりはじめた。

ジン

「うわあ、す、凄い！」

ガク

「や、やるなあ　こいつは見込んだ以上だ。」

しかしソラは

ソラ

「ラージ！」

と言っても変化無し。

ガク

「こいつはまだ時間がかかりそうだな。」

ガクはソラを厳しい表情で見つめた。

第五話：次の試練（前書き）

ソラとジンは、ガクの教えもあり、なんなくラージを習得した♪
♪

第五話：次の試練

ソラ

「ラージ！ラージ！」

波の音にも負けずに唱える。しかしソラのリングは全く動じない。

ガクは仕方なくソラにヒントをあげた。

ガク

「ソラ、リングってのは体の一部なんだ、だからお前が焦るとリングを発動しにくくなる。」

ソラ

「そういうことが 分かったよ！」

そう言うとソラは深く深呼吸をした。

ソラ

「ラージ！」

すると とても大きなリングになった。

ガク

「おいおい、こんなにでかいリング作れんのかよ」

ソラに聞こえないくらいの小声でボソツと言った。

しばらく二人は東京の都市と小笠原を行き来しラージの練習をし続

けた。

そして数日後

ガク

「よし、二人ともよく頑張った。次の段階へ移ろう」

ソラ

「ヤッター！でも疲れたあ」

ジン

「俺はそんなに疲れてないな。」

ガク

「ソラは疲れててジンが疲れてない理由はなあ、ソラが速攻型、ジンは持久型だからだよ。まあその分ソラは天力が高いんだろうね。」

ソラ

「天力って 何？」

ガク

「天力っていうのは、まあ簡単に言えばエネルギーかな。だからソラは高い天力を持っているからラージの時も大きいリングが作れたんだ。ただ、ソラはラージを30分しか維持できないけどね。ちなみにジンは大きさは普通だけど、ラージを長時間（二時間）維持できることに關してはプロ並だね」

ジン

「そつなんだ 天使って色々あるんだねえ」

ガク

「そうだな。よし、それじゃあ一旦部屋戻るぞ。」

ソラ

「えっ？さっき次の段階へ移るって」

ガク

「次の段階は　あの牢獄からの脱出だ。」

ジン

「でもガクさん。俺等はピッチリングとラージと空飛ぶ位しか出来ないよ。」

ガク

「大丈夫。お前らはこの修行でリングレベルが上がっているはずだ。という事は」

ソラ・ジン

「ピッチリングの威力が上がる！」

ガク

「そういうこと」

ジン

「じゃあ早く戻ってチャチャッと終わらせようぜ！」

ソラ

「んだな！」

ガク

「じゃあ一旦戻るぞ、ワープ！」

みるみるうちに部屋へワープした。

ジン

「よっしゃあ早速脱出だああ！」

ガク

「待て。脱出は今日やるとは言っていない。」

ソラ

「えっ？じゃあいつやるんだよ！」

ガク

「三日後だ。」ジン

「そんなに待てないよあ　なんで三日後なんだ？」

ガク

「それは作戦会議とか色々やらなくちゃならないからだ。」

ソラ

「そんなことやってられるかよ！」

ガク

「二人とも、この修行は戦闘時における洞察力テストなんだ。」

二人はこの言葉を聞き、急に目が覚めたかのように

ソラ・ジン

「三日待ちます！」

と勢いよく言った！

ガク

「よし、じゃあとりあえず飯でも食えや。」

そう言つてガクは三日前に配布されたお握りを手渡した。

ソラ

「こんなの食えんわあゝ」

まあそんなこんなであつという間に三日たった

第六話・脱獄その一（前書き）

ソラとジンは、ガクの出した課題をこなすことが出来るのか???

第六話：脱獄その一

ソラとジンは刑務所脱獄計画のために、必要最低限の水と食料を持った。

ガク

「よし、俺は先に外出てるから、頑張って出てこいよ。」

そういつてガクはワープでその場から消え去った。

ソラ

「よし、じゃあ俺らも行きますか！」

ジン

「まずドアをぶち破るか。」

ソラ

「まで、それじゃあ破壊音で警官にバレちまう、こつこつのはバレーに脱獄した方が身のためだ。」

ジン

「となるとどうやって脱出しようか」

ソラ

「俺にいい考えがある」

ジン

「その方法ってなんだ？」

ソラ

「それはなあ」

ソラはジンの耳元でその内容を誰にも聞こえないように言った。

ジン

「うーん、多分大丈夫じゃないかな。ちょっと練習させて。」

そう言ってジンは自分のリングを強く握って楕円形にし、こう言った。

ジン

「ラージ！」

すると、そのリングは縦長に大きく伸び始めた。

ジン

「うおお、成功した！」

ソラ

「これで準備は整ったね。」

ジン

「早速作戦実行しますか！」

するとジンはいつもドア付近をウロウロしている見張り役の人に向かってドアの隙間からラージをした。

実はこの見張り役の人の後ポケットにはこの部屋の鍵を持っているのだ。

ジンはリングを徐々に伸ばしていき、鍵を取ろうとした。

鍵とリングの距離は段々と近くなり、ついに鍵を取った。

ソラ

「よし！このまま戻して鍵開けようぜ！」

ジン

「分かった。」

ラージをもとの大きさに戻していき、ジンは鍵を開けた！

二人はさっさと部屋から脱出した。

とりあえずある道を通ったが出口が分からない。そしてかれこれ20分たった

ソラ

「いつになったら出口着くんだよ」

ジン

「多分 もう少しだと」

次の角を曲がった時突然前に大柄の警官にジンはぶつかった。

警官 A

「何やってるんだあ ちょうどいい、さっき会議でお前らの死罪が確定した、今ここで葬ってやる！」

警官は銃を取りだし一発打った。

その銃弾はソラのこめかみをかすった。

ソラ

「痛っ」

ジン

「大丈夫か！何だあの武器は？」

ソラ

「分からないけど当たったらかなりのダメージがくると思う。」

警官 A

「ワアッハッハッハ、銃に勝る武器など無いわぁ！」

ソラ

「ならこれはどうだぁ、ピッチリング改！」

ジン

「改？」

ソラの投げたリングが警官へと向かう。

警官

「何だそのヘナチヨコブーメランわぁ」

警官が笑っている間にリングは警官に網スピードで突進する。

警官 A

「こんなちっぽけなもんは、簡単に避けれるぜ！」

警官は言葉の通り横へズレて回避しようとした。しかし

ソラ

「ラージ！」

この言葉を放った途端、リングは一気に大きくなり、横へ避けた警官をも巻き込んだ。

警官 A

「うわあああゝ」

警官はその場で倒れたが、最後の力を振り絞り無線を手にしこう言った。

警官 A

「緊急事態発生、天使2名が逃走、1名は未確認。」

警官はそれを言い終わりその場で気を失った。

第七話：脱獄その二（前書き）

ソラは敵を倒してひと安心。と思いきや新たな敵がゾロゾロ。どうなる？

第七話：脱獄その二

ソラとジンは、警官を一人倒し、その場を後にした。

ソラ

「人間なんてチョロいな、ピッチリングだけであの様だし。」

ジン

「そんなもんだろ、そんなことより次に敵が来たら俺に戦わしてくれ、やりたいことがあるんだ。」

ソラ

「おっ！ジンも新技か？そうゆうことなら任した！」

ジン

「ありがと！」

そう言ってる間もなく、新たな警官が現れた。

警官B

「おっ、お前らの天使か？捕獲だあ！」

ジン

「じゃあお手並み拝見といくかな。」

ジンはリングを持ちいつものようにリングを持ちラージと唱える。

そしてそのリングは徐々にトンファーの様な形をしていった。

ソラ

「ジン、もしかしてこれは」

ジン

「そう、リングを変形させて作った武器だよ。」

警官B

「はん、銃を持ってる俺にそんなもので対抗しようってのか!」

警官は銃を構えて叫んだ。

しかし、ジンは動揺しなかった。

なぜなら

ジン

「ラージ!」

ジンのリングは警官の腹に一直線に伸びて、見事命中!

警官B

「フグア!」

そのまま見事に警官を倒した!

ジン

「ふう、やっぱりか。」

ソラ

「何がやっぱりなんだ?」

ジン

「ん？ラージは使いようによっちゃあ最強になれるってことさ！」

ソラ

「あ！なるほどね！」

そしてその様子を遠くから透視能力で見ていたガクは、

ガク

「うん、あいつらなかなかやるな、ラージを使いこなせばもっと成長するはずだ。」

と一人で呟っていた。

そしてそのうちソラとジンは、出口まであと一息というところまで来ていた。

ソラ

「この地図によると出口はもう近そうだね」

近くにある署内案内板を指さしていた。

ジン

「よぉーし、はやく脱出してガクに新しい技教えてもらおうと！」

ソラ

「そうだな、早いところ脱出だ！」

警官C

「それはどうかな？」

突如警官が現れた。

ソラ

「また出たよ、いい加減消えてくれ。ピッチリング！」

ソラのリングが警官Cの頬をかすめる。

警官C

「痛っ！」

ソラ

「ラージ！」

ソラのリングはでかくなる　はずだった。

しかしそのリングはどこからともなく現れた数え切れないほどの警官に差し押さえられた。

ソラ

「俺のリングかえせえ！」

警官C

「へっやだね！ほしけりやここまで来いよ。」

ソラ

「ムキー、あいつム力つく！」

ソラは隠していた背中に生えた翼を大きく広げ今にも飛び出す勢い

だ。

ジン

「待ってソラ、俺があのにグ取り返してくるから、ソラはここにいて。」

ソラ

「だけだよお」

ジン

「大丈夫、信じて。」

ソラ

「分かったよ相棒！」

ジン

「サンキュー」

そう言ってジンは敵の方へ突っ込んでいった。

第八話：脱獄その三（前書き）

ジンは果敢にも敵集団へ一人で突っ込んでいく。果たしてどうなる？

第八話：脱獄その三

ジンは警官軍団へ突っ込んだ。

警官C

「ああん？お前一人で来るとはいい度胸だな！お前ら、あいつを撃て！爆弾も投下！」

警官たちのライフルが火を噴いた。

次々とジンを襲う銃弾。そして爆弾も。

銃弾や爆弾の煙のせいでソラの視界からジンが見えなくなった。

ソラ

「ジーン！」

警官C

「ハッハッハ！天使の丸焼きの出来上がりだあ！」

警官達の攻撃も止み、徐々に爆弾の煙が晴れてきてた。

しかしそこにはジンはいない。

警官C

「天使いゝ、どこだあゝ」

ジン

「じじじわー！」

ジンは天井に張り付いていた。

そつ、襲われる瞬間に翼で飛んでいたのだ。

ソラ

「全くヒヤヒヤしたぜ！」

ジン

「悪いな。」

警官C

「戯れ言もたいがいにしな！おい、警官D、ロケットランチャーであいつを撃ち落とせ！」

警官D

「アイアイサー！」

警官Dはロケットランチャーの照準をジンに合わせた。

ジン

「やべっ！」

警官C

「今だあ行けい！」

ズキューン！ロケットランチャーは発射され、天井に命中した！

警官C

「今度こそやったか？」

ジン

「あまいね。」

警官C

「なぜ　なぜ無傷なんだ　」

ジン

「ランチャーがこっちに来たときとつさにコイツを使ったのさ。」

そう言ってジンはリングを壁に当ててラージと唱えた。

するとリングは壁を支点に敵の方へ目にも止まらぬ早さで一直線。

すかさず敵の懷に潜り込みソラのリングを奪い取った。

ジン

「ソラのリングは返して貰うぜ!」

警官C

「い　いつの間に!」

ジン

「さっきランチャーを受けた時は天井を支点にしてたんだぜ」

ソラ

「なるほどそれでか　」

ジン

「ほらソラ、リングだ!」

ジンはリングをソラの方に投げた。

ソラはそれをキャッチするとすぐに戦闘体勢になった。

ソラ

「サンキュージン！ やっと動けるぜ！」

警官C

「くそっ、こいつら強い」

ジン

「俺らはまだ強くない、お前らが弱いんだよ。」

警官C

「そうだな、だが警察官の誇りをかけてお前らを捕まえてやる！」

そう言つと警官Cは懷からトンファ―を出した。

ソラ

「なんだあの武器？」

ジン

「さあなんだろう」

二人が謎の武器に困惑していると、突然ジンの頬目掛けて警官Cのトンファ―が襲ってきた。

ジンはギリギリの所で空を飛んだ

ジン

「は、速い！」

警官C

「俺の攻撃を避けたあやるなあ、俺が真に得意とするのはこのト
ンファーなんだ！」

ソラ

「あいつ速いなあ」

ジン

「ああ、これは厄介だね。」

ソラとジン、万事休すか？

第九話・脱獄その四（前書き）

ソラとジンは色々な思考をこらして敵と戦っている

第九話：脱獄その四

ジン

「あの警官どうやって倒す？」

ソラ

「いや 分からない」

警官C

「うおりあゝ！」

警官はトンファーを振り回す。

ジン

「ひえゝ、対応出来ねえ。」

するとソラはあることを思い出した。

そう、この修行の目的。

ソラ

「ジン、何もこいつを倒さなくなっただっていいんじゃないか？俺らの目的はこの刑務所から脱出することだ。」

ジン

「それもそうだな でも出口は警官達の後ろ側にあるから、こいつらを一旦巻かないとな。」

ソラ

「そうだな　どうするか」

警官C

「ハハハ、何をコソコソ話しているのだ！くたばれ！」

警官はトンファーを振り回す。

ソラ

「ヤッベッ！」

ジン

「しょうがない、まずはあのトンファー野郎をどうにかしないと
」

ソラ

「そうだな、よし、ピッチリング」

ソラのリングが空を切る。

ソラ

「いっけえ！」

警官C

「ふっ、またその技か　さっきの二の舞だな、いけ！わが忠実な
る僕、警官達よ！」

警官達

「ウキヤァー！」

ソラ

「ふっそう来ると思っただぜ、」

そう言うときソラは羽を二、三本ぶち抜いてこう言った。

ソラ

「フェザーナイフ！」

ソラはそう言うとき羽を投げて、自分のリングに当たってリングを回転させた。

リングは円を描くように回りつづけた。

ソラ

「ラージ！」

ここでラージを唱えることにより、螺旋状の巨大な大玉が出来るのだ！

警官達はその渦に巻き込まれバツバツと倒れていった。

警官C

「そ　そんな馬鹿な　俺の最強の子分達が　」

警官Cはおろおろしていると警官Cの背後にいきなりジンが現れた。

ジン

「お前の負けだ、警官C！」

ジンは素早く手刀を繰り出し警官Cは倒れた。

ソラ

「結局この部屋の敵全員倒しちゃったな。」

ジン

「まあこれで出口に出られる訳だ！」

ソラとジンは遂に出口を出た。

ガク

「やあ、よく出られたねえ」

ソラ

「まあねえ！楽勝楽勝！」

こうしてソラとジンはこの難関を見事潜り抜けたのだった。

その夜ガクはソラとジンが寝た頃に、一人で何かをしていた。

ガク

「グハア、クソ体が持たねえ」

ガクは血を吐いていた。

ガク

「だが俺が死んだらソラとジンは」

そう言いながらガクはある本を開いた。

その内容はこうだ

「天使が人間界に行くと、物凄い早さで成長する、しかしその代償に、天使の力を失う。」

ガク

「俺がソラとジンに結界を張ってやらないとあいつらもいずれは天使の力を失ってしまう！」

この天使の力を失うこと

その名も

「lost angel」

第十話・NEXT STAGE（前書き）

ソラとジンは新たな技を教わるべく、ガクへと駆け寄る。そして

第十話：NEXT STAGE

朝ソラとジンは起きると、ガクに次なる修行について話した。

ソラ

「ねえガク、早く次の修行しようよぉ！」

ジン

「俺も早く修行したい！」

ガク

「そうだなあ　　そういや、ジンはソードを身につけたらしいな。」

ジン

「??　　ソードって、あのリングを楕円にしてラージを唱えるやつか？」

ガク

「そうだ、その呪文は次からソードと言えば剣になるから、試してみな！」

ジン

「分かったよ　　ソード！」

するとジンのリングは剣になった。

ガク

「うーん　あれだな　見た感じ剣の切れ味が足りなそうだから、ジンはソードの切れ味を上げる修行だ！練習によっちゃあ、その剣

で空を切って遠くの敵も倒せるぞ！」

ジン

「早速修行してみるよ！」

ソラ

「俺は俺は？」

ガク

「ん？お前はなあ、こいつだ」

ガクは自分の羽を手にとってニコツと笑った。

ソラ

「うおおー、何だかカツコイイ！」

そしてガクは空を飛び叫んだ。

ガク

「フェザーフェニックス！」

するとガクの広げた羽から無数の羽がナイフのように発射された！

ソラ

「すげえ この技があれば戦いの時も大分楽だぜ！」

ガク

「まあ頑張って特訓しな！コツは天力を羽に集中することだ」

ソラ

「分かったぜガク」

ソラとジンは修行に向かうとガクはまたしても血を吐いた。

ガク

「つつ ヤバいな もってあと10日だ なんとか間に合ってくれ」

ガクは血を吐きながらも、なんとか意識を保った。

2日後

ジン・ソラ

「出来たあゝ！」

ガク

「よくやった、もうお前らは、レベルで言って天光γだ」

ジン

「そんなに高いのか もう神秘の雫とか要らないな。」

ガク

「」

ソラ

「どうしたのガク？」

ガク

「ついにこの日が来た」

ジン

「何言っただよ?」

ガク

「お前らに全てを話すときが来たと言うことだ。」

ソラ

「!?!? 全てって?」

ガク

「実は俺らは もう天界には帰れない。」

二人に衝撃が走った。

第十一話：出発（前書き）

ソラとジンは天界へ帰れないという事実を知った、果たしてええ！

第十一話：出発

ジン

「天界には帰れないってどういうことだよ!」

ガク

「ジン、天使の話は最後まで聞け! 昔の俺等じゃ天界に帰れないと言っことだ。」

ソラ

「なあんだ、そういうことか　ってどうやって天界に帰るんだよ? 普通にミラーホール通って帰りやいいじゃないのか!」

ガク

「通常ならな、しかし今は状況が変わってきてる　俺等を付け狙う誰かがいるせいでミラーホールが使えない」

ソラ

「じゃあどうやって天界へ帰るんだよ?」

ガク

「それはなあ、君等が求めていたもの『神秘の雫』を使うのさ!」

ジン

「そうか! なんでも願いが叶う神秘の雫なら天界へも帰れるって訳か!」

ガク

「そうだ。そしてその神秘の雫がある場所というのは　世界で一

番高い場所 エレベストだ！」

ソラ

「そこに神秘の雫があるんだね？」

ガク

「そつだ。しかしそこに行くには以前の君達のレベルじゃ無理だ」

ジン

「だからエレベストに行けるように特訓したんだね？」

ガク

「まあそんなとこだ。」

ジン

「なるほどね ところでさっき言ってた俺等を付け狙う誰かって？」

ガクは一瞬動揺した。しかし直ぐに正気に戻り

ガク

「さあな、ただ俺等の敵であつて敵ではないやつだ」

ソラ

「敵であつて敵ではない？どついうことだ？」

ガク

「さあな。」

ジン

「まあいいじゃん！じゃあもう今からでもエレベストに行こうよ！」

ガク

「そうだな、じゃあまずはエレベストまで飛んでくぞ！」

ソラ

「どんくらいでエレベストに着くの？」

ガク

「多分何も無ければ10時間で着くかな？」

ジン

「なあんだ、今日中に着くじゃんか！」

ガク

「いや、多分途中で敵がいるから丸一日はかかることを覚悟した方がいいぞ。」

ソラ

「げっ！24時間も飛行するのかよ！」

ガク

「その点は大丈夫だ、お前らは修行したから体力は付いているはずだ」

ジン

「よし、それなら大丈夫だ！いざエレベストへ！」

ソラ

「オー！」

第十二話：コウとリン（前書き）

エレベスト行きもきまり、夜を過ごしていた三人、しかし異変が

第十二話：コウとリン

ソラとジンはガクが天力を練り上げて作った家でエレベストへ向かう準備をしていた。

ソラ

「とうとう明日だな。」

ジン

「ああ、なんか緊張するな。」

二人が話していると、ガクの部屋から声が聞こえた。

二人はそつと、部屋を覗くと

ソラ

「あれって 血？」

ジン

「多分」

ソラとジンが見た光景は、部屋中血だらけに染まる床や天井だった。思わず身を引いてしまう程の血に染まった部屋だったが、二人は意を決して部屋に入った。

ソラ

「ガク！どうしたんだ！」

ガク

「いや、ただの鼻血だ」

ジン

「んなわきゃねえだろ！前から思ってたんだけど俺等に何か隠してるだろ？」

ガク

「」

ソラ

「ガク 一人で背負い込むのは止めてくれよ。」

この言葉にガクはついに全てを話す気になった。

とりあえずソラとジンはガクを手当てし、椅子に座らせた。

ガク

「まず、最初に 俺とお前らの関係から話しておくか。」

ソラとジンは真剣に聞いた。

ガク

「10年前、俺には二人の親友がいた。コウとリンだ。コウは元気な男、リンはおてんばな女だった。」

ソラ・ジン

「」

ガク

「コウとリンはやがて結婚し、俺は心からその事を祝った。しかし」

10年前

コウ

「なあリンとガク、人間界に行かないか？」

リン

「なんだか恐いわ。」

コウ

「俺が守るから大丈夫さ！」

ガク

「お二人さんお熱いことで！」

コウ・リン

「うるさい！」

そして三人は人間界へ行った。

が、俺らは人間界で罪を犯した。

人を一人勢いで殺してしまったんだ。

その時三人は人間界に住む神様に捕まりそうになった。

だが

コウ

「二人は逃げろ、殺したのは俺だ!」

ガク

「バカヤロー、お前を置いて逃げれるか!」

コウ

「実は、リンは妊娠しているんだ。」

リン

「コウ、それは」

コウ

「だからガク、リンを守ってくれ。じゃあな。」

そういうとコウはリングを光らせ、目眩ましをして、一人神様の所へ行った。

ガク

「コウー!」

その後ガクとリンは気を失った。

目を覚ますと

リン

「私、コウを助けてくる。」

ガク

「馬鹿!それじゃあコウのしたことは無意味じゃないか!」

リン

「そうね、今はこの子達を産まなきゃ。」

そして、リンの子供は産まれた。

なんと双子というから驚きである。

そしてリンは言った。

リン

「あなた達の名前は ソラとジンよ。」

第十三話：神（前書き）

リンの正体は、ソラとジンの母親だった。そして二人は

第十三話：神

ガク

「その二人の子供どうするんだ？」

リン

「どうするって育てるに決まってるでしょ！」

ガク

「一人で育てる気か？」

リン

「当たり前よ！まあもしもの時はこのバッヂで助けを呼ぶわ！」

そういうとリンはガクにバッヂを渡した。

リン

「このバッヂは私の天力が練り込まれてるの、私が何かあなたに助けを呼ぶときにはそのバッヂが鳴るから」

ガク

「分かった、だが無理はするなよ。」

リン

「ええ。」

こうして二人はバラバラに行動した。しかし

バッヂ

「プンプン」

バッチがなった。

ガクはすぐにリンのもとへ向かった。

到着すると、そこには神と戦うリンの姿があった。

ガク

「リン！」

リン

「ガク 来てくれたのね、お願いがあるの。その子達を連れて、天界へ帰って。どうやら神といえど天界には入れないらしいの。だから、人間界に来たときに通ったミラーホールを通って帰るのよ」

ガク

「リン！駄目だ！お前を見捨てちゃ コウに面目がたたねえ。」

リン

「ガク、コウはもうこの世にはいないの。だからその子達を守る権利は私にあるわ。だから 私に構わず」

神

「ゴチャゴチャとぬかしている暇があるとは、余もなめられたものよのお。」

神はリンに攻撃を仕掛けた。

溝打ちだ！

リン

「がはっっ！」

ガク

「クッ、リン、いつか必ず助けるからな！」

ガクはリンの言う通りに子ども達を連れて逃げた。

最後に

ガク

「おい、神とやら、お前の名前はなんだ！」

神

「わしか？わしの名はベイブ」

ガク

「俺はガク、ベイブ、お前は必ず倒す！覚えてろよ！」

ガクはそういうと、急いで逃げて、やがてミラーホールに入り、やがて天界へ帰った。

そしてガクは二人の子供を従兄弟に預けた

ガク

「とまあこんな感じだ。」

ソラ

「ということは」

ソラ・ジン

「僕達は双子？」

ガク

「そういうことだ。」

ジン

「ということは今まで親だと思ってた親父やお袋はガクの従兄弟なのか」

ガク

「今まで黙っててすまない」

ソラ

「いや、本当の事を言ってくれてありがとう。」

ガク

「ああ、それと前に言った敵であって敵でないやつとはそのベイブの事なんだ。」

ジン

「そうか　ベイブは正義のために天使を倒そうとしているだけだからな。」

ガク

「あともうひとつ言うことが」

ソラ

「なんだい？」

ガク

「実は　あと8日で天界に帰らないと俺は死んでしまう。」

ジン

「!?!」

ガクはその事を全て話した

その後ソラとジンは黙りこくった。

第十四話：エレベスト（前書き）

ソラとジンは、ガクの過去を知りブルーになる・・・

第十四話：エレベスト

出発当日、そしてガクの余命残り一週間

ソラ達の間では沈黙が漂っていた。

しかしそれを破ったのは以外にもジンだった。

ジン

「ようし、早く行こうぜ、一週間以内に神秘の雫で天界に帰ればガクは助かるんだろ？」

ソラもジンに励まされたせいか元気をだした。

ソラ

「そうだな、くよくよしてても仕方ないさ！」

こうして三人は空を飛び、エレベストに向かった。

まずは日本から抜け出すために日本海を横断だ。

ガク

「海には危険がいっぱいだから、気を付けろよ。」

ソラとジンはコクリと頷いた。

そして三人は日本を発った……

海の途中には、手強い敵が沢山いた。

しかし、ソラとジンにかかればそのくらいはとうとも無かった。

そして敵をバツバツと倒していき

三人は気が付くと、エレベストのふもとまで来ていた。

その日はエレベストのふもとで野宿。

ガクの余命残り六日

ガク

「よし、もし事が上手く行けば、今日中に天界に帰れるぞ。」

ソラ

「やったあ！」

しかしこの時事が上手くいきすぎていることに三人は全く気付かなかった。

山を登り七割くらいまで登り終えた。

始めに異変に気付いたのはガクだ

ガク

「おかしい　　ベイブの手下がいてもおかしくないのに　　なんだこの静けさは。」

ジン

「それは言えてる」

ソラ

「とりあえず登ってみようぜ」

しかし事件は直ぐに起きた。

?????

「かまいたち！」

そのかまいたちはジンの方にクリーンヒット。

ジンは倒れた。

ソラ

「ジンく！　くそ、てめえよくも！」

ガク

「までソラ、ジンは無事だ。」

ジンは笑い顔で立ち上がった。

ジン

「こいつがなかったらヤバかったぜ。」

そういうとジンは、リングで作った盾を指さした。

ガク

「こいつは神軍団三番隊長、ブウだ。」

ソラ

「第三番？てことは神軍団で三番目に強いってことか。」

ジン

「いや、ベイブが一番上にいるからきつと四番だ。」

ガク

「ジンの言う通りだ、よし、こいつは俺に倒させてくれ。」

そういうとガクは戦闘態勢に入り、天力を放出した。

ジン

「す、凄い」

ソラ

「なんてオーラだ　　今までこんな力を隠してたなんて　　ガク凄
い！」

プウ

「ガク？お前　　あのベイブ様の認めた天使、ガクなのか？」

ガク

「ふっ、行くぞプウ、フェザーショット！」

羽から飛び出る無数のとがった針。

プウもマントでそれを相殺。

しかしプウも長くはもたなかった。

ガク

「いくぜ！俺が開発した五つの技の一つ目、ファースト、流れ星！」

リングを掲げたガクは、そのリングの中にフェザーショットを撃ち込み針を巨大化させた。

プウ

「わああああ〜」

プウは切り刻まれ倒れた。

ソラとジンは、それがあつという間のことだったために、呆然としていた。

ガク

「出直してきな！」

ガクの圧勝だった。

第十五話：最後（前書き）

山頂を目指す、三人は大変な事になる

第十五話：最後

ソラ

「それにしてもさっきのガク強かったねえ」

ガク

「俺だってベイブを倒す為に鍛えてきたからな」

そしてそうこうしているうちに頂上に着いた。

ジン

「ここが、天界に最も近い場所」

ガク

「ああそうだ、さあて、神秘の雫はどこかな？」

ソラ

「ガク、あの光ってるのがそうじゃない？」

そこには光輝く神秘の雫があった。

ガク

「おお、あれだ！」

ガクは喜んで光の方へ走っていった。

それを手に入れば全てが終わるからだ。

そしてガクは神秘の雫へ手を伸ばした。

しかし

グサッ！

バタッ

ジン

「ガクッ！」

それは一瞬の事だった。

ガクは棒のようなもので心臓の辺りを貫通して倒れた。

ソラ

「誰だあ、こんなことするのは！」

ベイブ

「ワシじゃ。」

ソラとジンは、ベイブを見て、一瞬威圧感を感じた。

しかし怒りでそれはすぐに吹き飛んだ。

ソラ

「コノヤロ！」

ソラはベイブに向かってフェザー系の攻撃をするため羽を広げた。

しかし

ガク

「さてソラ、おまえらじゃ勝てない　逃げるんだ。」

ジン

「でもガクが！」

ガク

「私はもう長くはない　そうだ、これを渡しておく、これには私の天力が凝縮してある。だから五日間はlost angelにならないはずだ。」

ガクは血を吐きながら話した。

ソラ

「ガクもう話すな。」

ガク

「　ああ、あとは　頼んだぞ　天界の天使達を　救ってや　つてくれ　」

ガクの目から一筋の涙がこぼれ、やがて光がガクを包み始めた。

ジン

「そんな！ガク、死んじゃ嫌だよ！」

ジンはそう言ってガクに触ろうとする、しかしジンの手はガクの体をすり抜けた。

そして、ガクの体は光となって、風にのって天へと舞って行った。

ソラ・ジン

「許さない　俺は神軍団を　許さない」

ソラとジンがそう叫んだ瞬間、二人の額に謎の紋章が表れた。

そしてその紋章は光だした。

ベイブ

「その紋章　まつ、まさか！」

ベイブは何かに気付いたのか、突然二人に攻撃を仕掛けた。

さつきガクに使った鉄の棒だ！

鉄の棒は二人めがけて勢いよく、そして二人に直撃した。

たちまち煙が上がる

ベイブ

「ハ、ハハハ、危なかったぜ。まさかこいつらがあのコウの息子だったとはな！」

しかし

煙が晴れると、そこには全身を紋章の光で包まれたソラとジンがいた。

ベイブ

「な　何！」

ソラ・ジン

「今度はこっちから行くぜ！」

二人はベイブへ一直線に飛んでいった。

第十六話：最後の戦い（前書き）

ソラ、ジンはガクを殺され最強のパワーを手にする。対するベイブは！

第十六話：最後の戦い

ベイブ「ええい、お前らに何ができると言っただ！行け、我が下部、一番隊長ベンと二番隊長ムウ！」

ベン・ムウ「分かりま」

バコバコ！

その瞬間、二人はボロボロになってその場に倒れた。

そう、ソラのフェザーショット決まったのだ！

ベイブ「くっ、やはり」

ジン「お前は来ないのか　ベイブ！」

ベイブ「ふっ、そうやすやすと引き下がるか！出でよ太陽！」

ベイブが天に両手をかざすと太陽の光がソラとジンに直撃した！

ソラ「くっ、目が」

ベイブ「ワシは天気を操れるのじゃ！」

ジン「クソッ。」

ベイブ「ここはワシのテリトリーじゃあ！行け、吹雪！」

そついうとエレベストはたちまち雪で溢れかえった。

ソラ「くっ、なかなかやるな　さすが神といったところだ」

ジン「俺は　負けない！」

ジンの額の紋章は、さらに輝きをました。

ソラ「　俺だって！」

ソラも共に輝きを増す。

そしてその輝きはベイブを包み込んだ。

ベイブ「なんじゃこの光は！ぐわああああ。」

ソラ・ジン「うおおおお！」

ベイブ「わしが　このわしが、こんな小僧に負けるのか、そんなことは許されない！」

するとベイブに一つの雷が落ちた！

それと同時にソラ達の光を絶ちきられた。

ソラ「ちっ、回避したか？」

ジン「そうみたいだぜ。」

ソラ「！？！？！？！？！？！？！？！」

ソラはこの時ベイブの本当の姿を見てしまった。

ベイブの身体中に雷をまとい、今までのベイブとは完全にオーラが違うものとなった。

ジン「こいつ　一瞬びびっちまったぜ。」

ソラ「だがこんなところで負けてる暇は無いぜ！」

ソラはそういうとフェザーショット&ピッチリングのダブル攻撃を繰り出した。

しかし

ベイブ「失せろ　」

ベイブの雷が二つの技を相殺しさらにそれはソラ目掛けて襲ってきた。

ソラ「くっ、フェザーガード！」

ソラは素早く天力をたくさん練った羽の盾でなんとか回避した。

ソラ「こいつぁ生半可な気持ちじゃ殺られちまうぜ！」

ソラはそう悟った。

第十七話：誇りと希望（前書き）

ついにベイブとのバトルは最終局面！！！！果たしてどうなる！？！？

第十七話：誇りと希望

ソラ「ジン、こいつあ強いぞ。こっちは連携で行こう!」

ジン「ああ、そうだな。いくぜ!」

ベイブ「」

ジン「行くぜ!」

ジンは右手に剣を持った。

そしてそれをなぜかソラに降り下ろす。

ジン「ソラ、受けとれ!」

ソラ「よっしゃあゝ、見よう見まねで覚えたガクの技、ワープ“改”!」

するとジンが降り下ろした剣は、ソラの目の前で突然消え、なんとベイブの顔面へワープした。

ベイブへ降り下ろされる剣。

ガキン!

ベイブの顔にクリティカルヒットした。

ベイブ「なるほどな」

ベイブは顔から滴る自分の血を舐めて笑みを浮かべながら言った。

ソラ「ゲツ、きいてないのか？」

ジン「でも血は出てるぜ！」

ベイブ「お主らは天力と紋章のコントロールがなつとらんなあ、もう茶番は終わらせるとするか。サンダーストーム！」

ベイブはソラとジンに向け攻撃した。

ソラ・ジン「わああああ！」

二人は感電してその場に倒れた。

黒こげの二人を見たベイブは勝利を確信した。

ベイブ「ふん、とるに足らんな。」

ベイブがマントをひるがえし、その場を離れようとしたその時！

ゴゴゴゴゴゴ

ベイブ「なんだ！」

するとソラとジンの持っていたガクの天力の練り込んだペンダントが光輝き出したではないか！

ベイブ「ま、眩しい　わああああ！」

二人のペンダントは紋章から受けた天力を光として放出した。

そして

ペンダントは割れた。

ベイブ「はぁはぁ、なんて光なんだ」

そしてベイブはこの時自分の体が腐敗していることに気付いた。

ベイブ「わぁぁア！このワシが、ワシが、若造二人にやられるなんて」

こうしてベイブはチリとなり消え去った。

ソラ・ガク「やった！倒した！」

しかし、ペンダントが無い今二人を守るものは何もなく、「loss
t angel」が始まった。

第十八話：l o s t a n g e l（前書き）

ベイブを倒した二人は喜びに満ちた！しかし悪夢は再び

第十八話：lost angel

ソラ「やつべえ、俺の身体、心なしに光だしたんだけど。」

ジン「その光はきつと天力だね！要はlost angelが始まったんだ。」

lost angel それは天使の力を失うこと そしてそれは死を意味する。

ソラ「ヤツベエじゃん！どうするんだよ？」

ジン「コイツを使うのさ。」

ジンは傍らに落ちていた神秘の雫を手についた。

ソラ「よっしゃあ、じゃあとつとと済まそうぜ！」

ベイブ「そいつはどうか？」

どこからともなく聞こえる声。

ジン「この声は ベイブ！死んだはずじゃ？どこにいるんだ、出てこい！」

ベイブ「そいつは無理な話だぜ。俺の身体はおまえらの力によって粒子レベルにまで分解されたからなあ！」

ソラ「ふん、そんなに身体になったってのに何ができるってんだ！」

ベイブ「ふっ、実は粒子レベルの身体になってもできる技が一つだけあるんだよ！」

ソラ「な 何！くっ、フェザーガード！」

ソラはとっさに防御呪文を唱えた。

ベイブ「ふっ、残念だがワシが使う技は物理的攻撃ではない！俺が使うのはこれだ！」

ベイブがそう言ったと同時に、突然雲が空一面に広がった。

ジン「なんなんだ？」

この時ソラはベイブがしようとしていることに気付いた。

ソラ「馬鹿！やめろ！」

ジン「どうした、ソラ？」

ベイブ「ふん、察しがいいな、ソラ！さすがは双子の長男とでも言うておくか。だがもう遅い！」

その瞬間空がピカッ！と光だした。

ソラとジンは反射で目をつぶった。

ベイブ「ふわははは！これで天界の天使も終わりじゃあ！」

ソラ「くそっ！回避できなかった」

ジン「おいソラ　一体何が起きたんだよ。」

ソラ「　じまったんだ」

ジン「えっ？」

ソラ「始まったんだ、天界のみんなにもlost angelが！」

第十九話：選択（前書き）

復活したベイブは良からぬ事を企んでいた！二人はどうするのか？

第十九話：選択

ジン「lost angelだって？くそつ、ベイブめ！」

ベイブ「ふん、お前らがワシを怒らせた罰じゃ！」

しかしベイブの身体は限界に近づいていた。

ベイブ「くつ、現世にいられるのももうわずかな　しかし悔いは無い、お前等天使を滅ぼすことが出来るからな！」

ジン「くそ！卑怯だぞ！他の天使は関係ないのに。」

ソラ「ベイブ、頼む、これ以上俺達を苦しめないでくれ！」

しかしベイブからの返答がこない。

ジン「ベイブ？」

ソラ「まさか、もうベイブは」

そうベイブは力尽きたのだ。

ジン「ちっ消えちまったか、まああれだけダメージ与えたからな。」

ソラ「だけどこの状況でしょう。神秘の雫は一つしか願いが叶わない。天界のみんなは危ないし、ガクには生き返って欲しい」

ジン「でもこんなときガクがいたら、天界のみんなを助けていたと思う。だから　天使達を」

ジンは涙をこらえきれず、泣きながらに言った。

ソラ「そうだね　じゃあ天界を救ったら　ガクのお墓　作つてあげよう　」

ソラも涙は流しながら言った。

そして二人は神秘の雫を天に掲げ、願い事をした。

ソラ・ジン「天界を、元通りにして！」

すると神秘の雫が突然目映いばかりの光を放ち、それは天界へと放たれた。

ソラ「よし、これで安心だ！」

ジン「　待てよ　なんか大事な事忘れてるような　」

ソラ「なんだっけ　はっ！」

ジン「なんか思い出したか？」

ソラ「ヤバイ　ヤバイよ　」

ジン「だから何が？」

ソラ「俺ら、神秘の雫無しじゃ　天界に帰れないよ　」

ジン「そっぴやそうだった！」

二人はあまりのショックにその場に腰を落とした。

第二十話：Destiny（前書き）

激闘も終わり、どうにか天界に帰ろうとする二人。果たして

第二十話：Destiny

天界

天光α「天神様、先ほど人間界から強力な天力反応をキャッチしました。」

天神「ん？それは妙じゃな。わしが見に行こう。」

天光α「そ、そんな！天神様がわざわざ」

天神「ちよいと散歩がてらじゃ。」

天神「それは、この天界でトップのものが名乗れる称号。」

天光α「分かりましたよ。くれぐれもお気をつけ下さい。」

天神「うぬ。」

人間界

ソラとジンは血を吐いてもはや動けない状況になっていた。

ソラ「くっ、ざまあねえな。」

ジン「lost angel　これほどは　ガクは毎日天力で僕達を守ってくれたんだね」

ソラ「俺等ここで死ぬんだな」

ジン「　ああ。」

ソラ「くそお、もつと天界で遊んどきゃよかった。」

ジン「俺等が死んだらみんな悲しむのかな　」

ソラ「さあな　」

この頃天神は、東京にいた。

天神「ふゝむ、ここも昔と変わらんなあ。」

そして天神は二人を探すために地球上に天力を巡らせた。

天神「天力最大解放！ほう！　　　　　　む、エレベストに反応が
二つ　　きつとこいつらじゃな。それにしてもこの二人　　天力
反応が薄い　　死期が近いのお。急がねば！」

この時ソラとジンは、天神の天力をかすかに感じ取っていた。

ジン「この天力　人間界に天使がいる　　きつとさっきの神秘の
雫の力に気付いて助けに来てくれたんたよ　　。」

ソラもボロボロになりながらも

ソラ「そう　　か　　良かった　　」

と小さな声で答えた。

そして、天神は二人の元に現れた。

しかし

ジン「ソラ、ソラ」!

天神が見た光景は、最早瀕死状態のソラだった。

第二十一話：ALIVE or DEAD（前書き）

天神が来たことにより、少しは状況が変わる

のか？？

第二十一話：ALIVE or DEAD

ジン「この天力　まさかあなたは　天神様？」

天神「そうじゃ、そんなことより、早くこの子に応急処置をして、天界で手術をしないと危ない。」

ジン「そんなにヤバいんですか？」

天神「かなりのう、お主の怪我はすぐ治る。」

天神はそういうと、ジンの大量に出血している腹を指差した。

するとその血は、みるみる内に固まった。

ジン「凄い　さすが天神様　」

天神「次はこっちの手当てじゃ！」

天神は直ぐ様天界と連絡をとり、ソラを天界へと運んだ。

天界総合病院

ジン「すごい　天神様ならこつても簡単に天界と人間界を行き来出来るのか　」

天神「お主もいずれ出来るようになる。」

天神はこの時、ジンの秘めたる力に気付いていた。

ジン「でも　とりあえず天界に帰ってこれてよかった」

ジンが涙を堪えて言った。

天神「　泣いてもいいんじゃないぞ」

ジン「え？」

天神「お主はまだ十歳、さぞ辛かったろう」

するとジンの目から一筋の涙が溢れた。

ジン「えええーん、怖かったよー。」

天神はジンが眠るまで頭を撫で続けた。

そして、ソラの手術は終わり、手術室の扉は開かれた。

ジンが直ぐ様執刀医の元へ駆け寄り尋ねた。

ジン「ソラは　ソラはどうなったの？」

少し間をおいて、執刀医は首を横にふった。

天神の話しによると、その後暫くの間、ジンは再び長い間、泣きじやくったという。

最終話・未来（前書き）

ソラの死

そして未来

感動のクライマックス!!!

最終話：未来

10年後

ある墓地の前に、身長が高く、風格があり、当時の幼さを微塵も感じさせないジンの姿があった。

ジン「ソラ、ガク、おはよう。今日から俺さあ、天光α（天神に次ぐ実力No.2）に就任するんだ。」

そう、その後ジンは努力し、やっとの思いでこの位に就くのだ。

ジンは就任式の前に天神に会うことにした。

ジンが天神の部屋をノックすると「どうぞ」という声が聞こえた。

ジンが入ると、そこにはヨボヨボなジイサンが一人。

天神「まあ座りなさい。」

ジン「はい」

天神「ジン、天光α就任おめでとう。」

ジン「はい、ありがとうございます。」

天神「あんなに小さかったジンが、もうこんなに成長するとはのお」

ジン「天神様のご指導がよろしかったから。」

そう、ジンは天神からこの十年間指導を受けて、ここまで成長したのだ。

天神「ワシはやるべきことは全てやった。もうこの座を退こうかの
お」

ジン「そんな、どうしてですか？」

天神「ワシはもう歳じゃ、ワシより強い天使だって何人もいる。ジンもその中の一人じゃ。」

ジン「天神様」

天神「それに、老後の生活とやらを早く体験したいしのお、フオッフオッフオッ！」

ジン「そうですね　天神様もう歳ですね」

すると座っていた天神がいきなり立ち上がり、ジンの方へ歩いていき、やがてジンの方に手を乗せた。

天神「ジン　ワシの　この天神という位を引き継いでもらえるか？」

それは突然の事だった。

ジン「この国のトップに立つということですか？」

天神「さよう。」

天界では、次の天神は今の天神が決める事になっているのだ。

ジン「しかし私はまだ天光αになっただけ。」

天神「そんなことは関係ない。お主なら出来る。ワシが保証する。なんたってワシの教え子じゃ。」

ジンは少々迷ったが、頭を縦に振った。

天神「分かってくれたんじゃな。ありがとう。」

その時ジンには天神の体が小さく見えた。

ジン「本当に長い間、お疲れ様です。」

1ヶ月後

ジンは天使が沢山いる場で天神就任会見を行った。

ジン「この度天神に就任したジンです。まだ20歳ということもあり不安要素は沢山ありますが、どうぞよろしくお願いします。」

その時天使達からの拍手がジンの耳に響いた。

そして、ジンはソラの事を思いだし、口元に笑みを浮かべた。

ジン「ソラ　ありがとう。」

すると、ジンのとなりにソラの幻影が見えた。

そのソラの顔は笑顔で満ち溢れていた。

ソラ「頑張れジン！」

ジンにはソラがそう言っているように聞こえた。

そしてジンは、また一歩大人の階段を登った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0408c/>

lost angel

2010年10月20日20時01分発行